

オセアニア[豪州]



1 農畜産業の概況

豪州の農畜産業は、国内総生産（GDP）の1.9%、就業人口の2.5%と、産業全体に占める割合は高くない（2020/21年度（7月～翌6月））。しかし、同年度の総輸出額に占める農畜産物の割合は12.0%と、輸出産業の中で重要な位置を占めている。

豪州では、国土面積（7億6920万ヘクタール）の約半分に相当する3億6468万ヘクタールが農畜産業に利用され、その大半は牛や羊の放牧地および採草地であり、小麦などを栽培する耕地面積は3165万ヘクタールに過ぎない（21年6月末現在）。

豪州の農業従事者数は、16/17年度が30万4375人（前年度比5.1%減）と減少したものの、20/21年度には、33万7675人（同1.1%増）と4年連続で増加した（表1）。

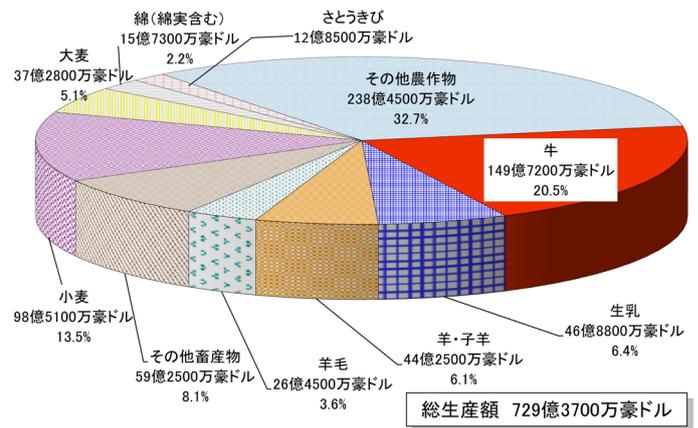
農畜産業生産額は、2000/01年度以降、おおむね増加傾向で推移しており、20/21年度は729億3700万豪ドル（同18.8%増）と大幅に増加した（図1）。このうち、畜産物の内訳を見ると、牛は149億7200万豪ドル（同2.8%増）とわずかに増加したものの、牛に次ぐ生乳が46億8800万豪ドル（同2.9%減）と減少した。このため、羊や羊毛などを含む畜産物全体では326億5500万豪ドル（同0.6%減）となった。一方、農作物は、小麦や大麦、綿などの主要農作物が軒並み増加したことにより、402億8200万豪ドル（同41.2%増）と大幅に増加した。

表1 農場数および農業従事者数の推移

（単位：戸、千人）

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
農場数	88,073	85,483	89,441	87,779	87,402
農業従事者	304.4	329.4	333.7	334.0	337.7

図1 農畜産業生産額（2020/21年度）



資料：ABARES「Agricultural Commodities」

注1：年度は7月～翌6月。

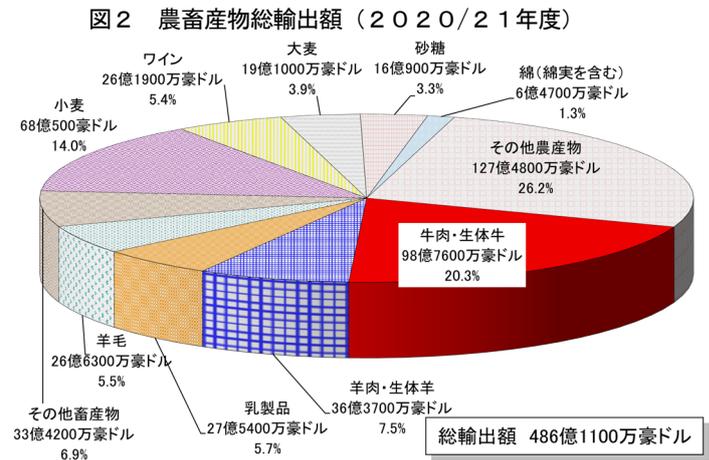
注2：割合は構成比。

注3：牛および羊・子羊には生体輸出用を含む。



写真1 肉牛の放牧風景（ニューサウスウェールズ州）

2020/21年度の農畜産物総輸出額（FOB）は486億1100万豪ドル（同1.1%減）、うち畜産物輸出額は222億7300万豪ドル（同15.2%減）といずれも減少した（図2）。畜産物輸出額の内訳を見ると、牛肉・生体牛が98億7600万豪ドル（同24.8%減）と大幅に減少した一方、乳製品は27億5400万豪ドル（同3.8%増）とやや増加した。



資料：ABARES「Agricultural Commodities」
 注1：年度は7月～翌6月。
 注2：割合は構成比。

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

豪州の生乳生産は、天候や牧草の生育状況などで大きく変動するとともに、酪農経営は、乳製品の国際市況および為替変動の影響を受けやすいという特徴がある。

豪州の酪農は、放牧を主体とする経営から、気候条件に恵まれ、牧草の生育が良好なビクトリア（VIC）州を中心に行われてきた。しかし最近では、度重なる干ばつにより放牧環境が悪化したことで、同州でも穀物や乾草などの購入飼料の利用も多くなっている。

同国で生産される生乳の約7割がチーズなどの乳製品に加工されている。2000年頃は、製造される乳製品の約6割が輸出向けであったが、最近では生乳生産量の低迷や人口増による国内需要の増加により4割程度となっている。しかし、依然として輸出志向型の産業である。

① 主要な政策

生乳の需給管理を目的とした制度・政策は2000年に廃止され、生産者は、収益性や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。デーリー・オーストラリア（DA）は、生乳の販売時に課される生産者課徴金などを財源に、これら生乳生産者のための販売促進や研究開発、市場情報の提供などを一括して行っている。

② 生乳の生産動向

乳用経産牛の飼養頭数は、1999/2000年度以降、飼養戸数の減少などにより減少傾向で推移していたが、2011/12年度には増加に転じた。しかしながら、18/19年度以降、干ばつによる生産コストの上昇や牛の淘汰が進んだことなどから再度減少傾向に転じ、20/21年度は138万頭（同0.7%減）とわずかに減少した（表2）。

表2 乳牛飼養頭数などの推移

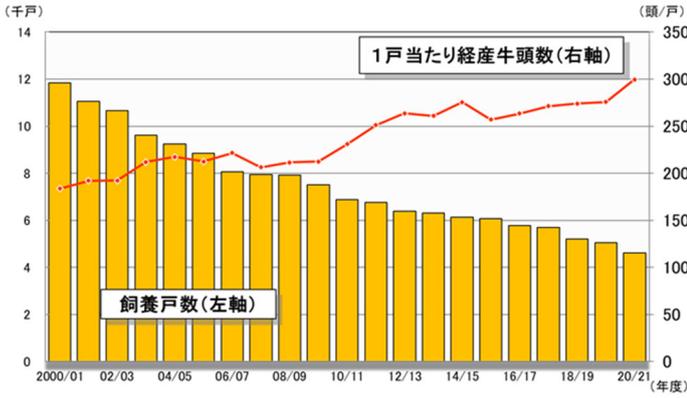
（単位：千頭、戸、頭）

区分／年	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
乳牛飼養頭数	2,606	2,627	2,341	2,361	2,330
経産牛飼養頭数	1,520	1,547	1,428	1,394	1,384
飼養戸数	5,771	5,699	5,213	5,055	4,618
1戸当たり経産牛頭数	263	271	274	276	300

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、
 Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
 注：年度は7月～翌6月。数値は各年度6月末時点。

飼養戸数は、小規模農家の離農や高齢化による廃業などに伴い長期的に減少傾向にあり、20/21年度は4618戸（同8.6%減）とかなりの程度減少した（図3）。一方、同年度の1戸当たり経産牛飼養頭数は、大規模化の進展により、300頭（同8.7%増）とかなりの程度増加した。

図3 飼養戸数と1戸当たり経産牛頭数の推移

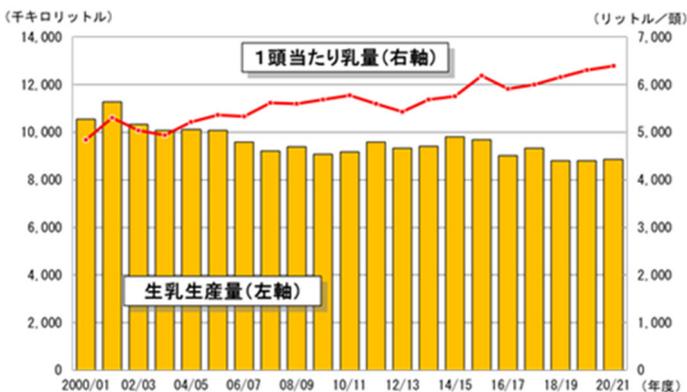


資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：年度は7月～翌6月。数値は各年度6月末時点。

生乳生産量の推移を見ると、1990年代から2000年代初頭までは、ガット・ウルグアイラウンド合意に伴う乳製品輸出拡大への期待などを背景に、増加傾向にあった。しかし、2002/03年ごろからは、干ばつや乳価の動向、恒常的な労働力不足などの影響により、横ばいから緩やかな減少傾向で推移している（図4）。20/21年度は、おおむね牧草の生育にとって良好な天候であったことなどから回復し、886万キロリットル（同0.7%増）とわずかに増加した。

経産牛1頭当たり乳量については、放牧が主体であることもあり、日本や米国などと比較して少ない。近年は、補助飼料の給与や遺伝的改良などから着実に増加しており、20/21年度は、6400リットル（同1.4%増）とわずかに増加した。

図4 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量の推移



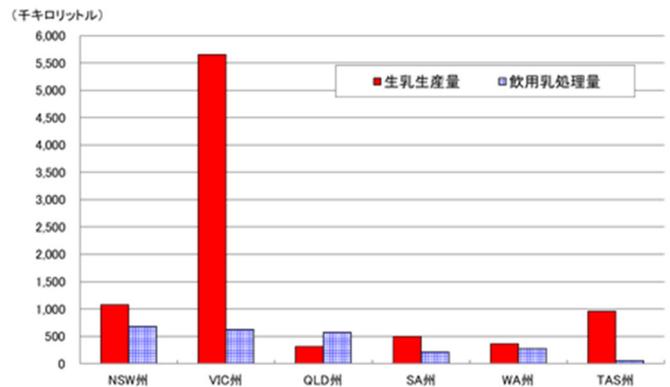
資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」
注：年度は7月～翌6月。

加工用に仕向けられる生乳の割合は、乳製品の輸出拡大に伴って徐々に上昇し、04/05年度には生乳生産量の8割程度を占めた。しかし、生産量の減少などから減少傾向で推移し、20/21年度は72.6%となった。

生乳生産量を州別に見ると、VIC州が全体の63.8%を占め、最大の酪農地域となっている（図5）。ただし、飲用乳向けの生乳処理量は、大消費地であるシドニーを擁するニューサウスウェールズ（NSW）州が最も多い。

このように、生乳生産に占める飲用向けの割合が州により大きく異なるため、乳業メーカーごとに決められる生産者乳価は、飲用向け割合が高い地域とそれ以外の地域とで異なっている。

図5 州別生乳生産量（2020/21年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注1：年度は7月～翌6月。
注2：飲用乳処理量は州間移動を含む。
注3：QLD=クイーンズランド、SA=南オーストラリア、WA=西オーストラリア、TAS=タスマニア。



写真2 スーパーマーケットの乳製品売場（シドニー市内）

③ 牛乳乳製品の需給動向

2020/21年度の主要乳製品の生産量を見ると、チーズが36万6200トン（同1.3%減）、脱脂粉乳

が15万3700トン（同4.0%減）と減少した。一方、バターが6万9200トン（同8.9%増）とかなりの程度増加したほか、全粉乳が5万2500千トン（同17.5%増）、バターオイルが1万2500千トン（同30.0%増）といずれも大幅に増加した（表3）。

表3 牛乳乳製品生産量の推移

（単位：千キロリットル、千トン）

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
生乳	9,016	9,325	8,793	8,797	8,858
飲用向け	2,501	2,493	2,471	2,468	2,425
加工向け	6,515	6,832	6,322	6,329	6,433
チーズ	348.7	377.7	381.1	371.1	366.2
脱脂粉乳	222.1	201.4	192.4	160.2	153.7
バター	85.5	79.7	61.8	63.6	69.2
全粉乳	63.2	84.0	48.5	44.6	52.5
バターオイル	14.5	13.6	12.3	9.6	12.5

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：生乳の単位は千キロリットル、乳製品の単位は千トン。

主要乳製品の輸出量を見ると、飲用乳は、常温保存が可能なロングライフ牛乳を中心にアジア向けが好調なことから年々増加しており、19/20年度は28万200キロリットル（同14.8%増）となった（表4）。その他の主要乳製品は、チーズが15万5200トン（同1.5%減）とわずかに減少したものの、脱脂粉乳が12万3400トン（同14.7%増）、全粉乳は5万200トン（同18.6%増）、バターが1万7700トン（同119.9%増）、バターオイルが7200トン（同89.6%増）といずれも増加している。これらは、乳製品消費量が増加傾向にある中国などからの強い需要にけん引されている。

表4 牛乳乳製品輸出量の推移

（単位：千キロリットル、千トン）

区分/年度	2015/16	16/17	17/18	18/19	19/20	輸出割合 (19/20)
飲用乳	188.6	217.3	235.8	244.1	280.2	11.6%
チーズ	166.7	170.8	165.8	157.6	155.2	42.4%
脱脂粉乳	153.3	156.6	151.2	107.6	123.4	80.3%
全粉乳	86.8	87.6	54.7	46.6	55.2	105.3%
バター	14.4	9.7	13.2	8.0	17.7	25.6%
バターオイル	6.9	6.4	8.1	3.8	7.2	57.9%

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

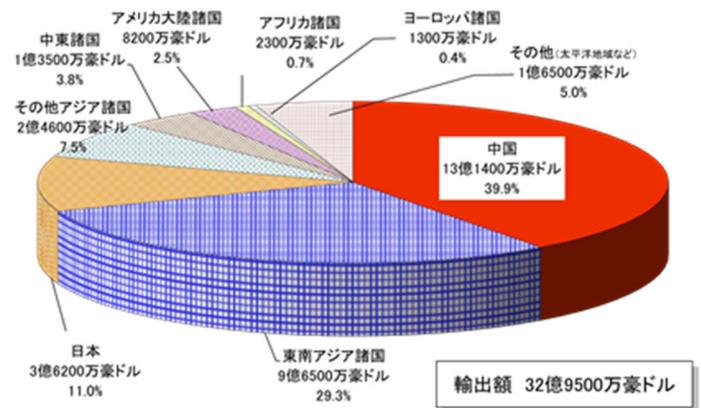
注2：飲用乳の単位は千キロリットル、乳製品の単位は千トン。

注3：全粉乳は、輸入原料から製造した育児用調製粉乳の輸出量も含むため、輸出量が生産量を上回った。

乳製品の輸出額は、アジア地域向けが多く、全体の87.6%と、圧倒的な割合を占めている（図6）。国

別に見ると、14/15年度までは、輸出額ベースで日本が最大の輸出先であったが、15/16年度以降、中国が最大の輸出先となっており、20/21年度では、中国は日本の3倍以上となった（全輸出額に占める割合：中国向け39.9%、日本向け11.0%）。品目別には、チーズは日本が主要輸出先であり、粉乳類（育児用調製粉乳を含む）は、中国、東南アジア諸国などが主要な輸出先となっている。

図6 地域別乳製品輸出額（2020/21年度）



資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

20/21年度の主要乳製品の1人当たり年間消費量は、ヨーグルトが9.5キログラム（同1.1%増）とわずかに増加したものの、その他の品目は軒並み減少した（表5）。品目別では、飲用乳が94.4リットル（同2.7%減）、チーズが13.4キログラム（同1.5%減）、バターが3.6キログラムと（同12.5%減）となった。

表5 1人当たり年間牛乳乳製品消費量の推移

（単位：リットル/人/年、キログラム/人/年）

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
飲用乳	102.8	100.7	98.6	97.0	94.4
チーズ	13.4	13.6	13.5	13.6	13.4
バター	4.8	4.7	4.0	4.1	3.6
ヨーグルト	9.1	9.0	9.5	9.4	9.5

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：飲用乳の単位はリットル、乳製品の単位はキログラム。

④ 乳価の動向

豪州の酪農・乳業は輸出志向型産業であることから、生産者乳価は乳製品国際市場の影響を強く受ける。

近年は、生乳生産量が伸び悩む中で世界的な乳製品需要の高まりを背景に、一定の乳量を確保したい乳業の思惑から、生産者乳価は上昇傾向にある。2020/21年度は、前年度が記録的に高い乳価（1リットル当たり54.7豪セント）であったことから、同52.7豪セント（前年度比3.7%低）とやや低下したものの、10年前（20/11年度：同43.2豪セント）の1.2倍超の水準となった（表6）。

表6 生産者乳価の推移
(単位:豪セント/リットル)

年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
生産者乳価	40.9	46.0	49.7	54.7	52.7

資料：Dairy Australia「Australian Dairy Industry In Focus」
注：年度は7月～翌6月。

（2）肉牛・牛肉産業

豪州の牛肉生産は、約7割を輸出に仕向ける輸出志向型産業である。また豪州では、数年に一度起こる干ばつや多雨などの気象動向の変化により、肉用牛生産の状況にも大きく影響を受ける傾向にある。このため、近年では気象動向の影響を受けにくく、中国などからの需要が高まっているフィードロットによる穀物肥育牛が増えてきており、放牧による牧草肥育牛との生産割合は半々程度になってきている。

肉用牛は、粗放的な飼養管理が可能のため、乳牛に比べると利用可能な草地の範囲が広いことに加え、熱帯・乾燥地帯などの自然条件の厳しい地域でも、熱帯品種を導入することなどによって飼養が可能となる。このため、内陸部の極端な乾燥地帯を除き、ほぼ豪州全土で、多種多様な品種による牛肉生産が行われている。

① 主要な政策

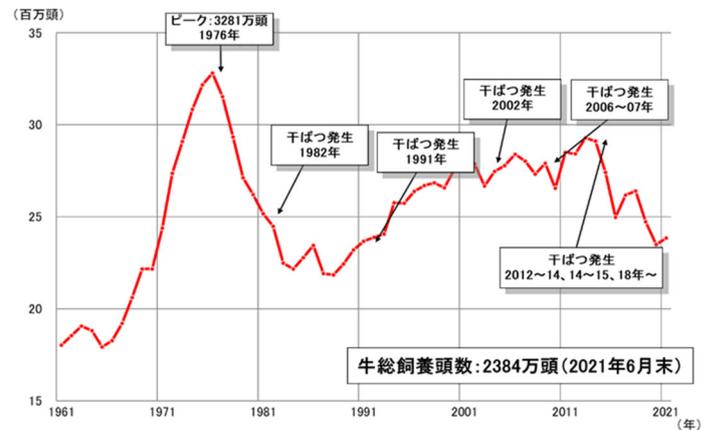
肉用牛や牛肉の需給管理を目的とした制度・政策は特になく、生産者は、気象動向や国内外の市場動向を勘案しつつ経営を行っている。また、豪州食肉家畜生産者事業団（MLA）が販売促進、研究開発、市場情報の提供などを、アニマル・ヘルス・オーストラリアが家畜疾病の管理・監督や情報提供などの家畜衛生に関する業務を、

全国残留検査（NRS）が残留物検査をそれぞれ行っている。これらの事業財源の多くは、生体牛の取引（販売）時に課される生産者課徴金によるものである。

② 牛の飼養動向

豪州の牛飼養頭数（乳牛を含む）は、1976年には過去最高の3281万頭を記録して以降反転し、88年には2185万頭と、ピーク時に比べ3分の2まで減少した（図7）。その後は、干ばつによる影響を受けながらも、概ね緩やかな増加傾向で推移してきた。

図7 牛飼養頭数の長期的推移



資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」、ABS「Agricultural Commodities」
注1：乳牛を含む。
注2：各年6月末時点。
注3：2016年以前はABARESの数値、2017年以降はABSの数値。

近年では、13年に2929万頭の高水準を記録したものの、12年後半～14年、14～15年に豪州東部で大規模な干ばつが続き、牛の早期出荷や繁殖雌牛の淘汰が進んだことから、飼養頭数はかなりの程度減少した。17年は、天候の回復に伴い牛群再構築が進んだことで増加したが、18年1月から再び干ばつが発生したことにより減少に転じ、約30年ぶりの低水準となった。20年からはラニーニャ現象が断続的に発生し、牧草の生育に必要な降雨が続いていることから牛群再構築が進展しており、21年6月末時点では、2393万頭（前年比2.1%増）となった（表7）。

表7 牛飼養頭数の短期的推移

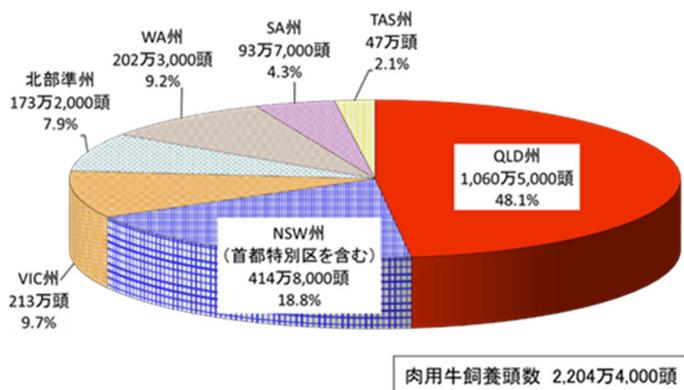
(単位:千頭)

区分/年	2017	18	19	20	21
肉用牛	23,570	23,768	22,382	21,142	22,048
乳用牛	2,606	2,627	2,341	2,361	2,383
合計	26,176	26,395	24,723	23,435	23,934

資料：ABS「Agricultural Commodities」
注：各年6月末時点。

肉用牛飼養頭数を州別に見ると、クイーンズランド(QLD)州が全体の48.1%、ニューサウスウェールズ(NSW)州が18.8%、ビクトリア(VIC)州が9.7%と、東部3州で全体の8割近くを占め、豪州における牛肉供給の根幹を成している(図8)。

図8 州別肉用牛飼養頭数(2020年6月末時点)



資料：ABS「Agricultural Commodity」

③ 牛肉の需給動向

ア 生産動向

牛と畜頭数(子牛を含む)は、2018年に再度発生した干ばつの影響により、18/19年度以降は増加に転じ、19/20年度は869万7000頭となった。その後、牧草の生育に必要な降雨が続き、牛群再構築が進展したことから減少に転じ、21/22年度は614万8000頭(前年度比7.1%減)となった(表8)。

平均枝肉重量は、と畜頭数に占める穀物肥育牛の割合が増加していることや、多雨により牧草や飼料が潤沢にあること、また、肉牛価格が堅調に推移していることな

どから近年、増加傾向で推移しており、21/22年度は320.7キログラム(同6.4%増)となった。このようにと畜頭数の減少分を、平均枝肉重量の増加で一部相殺しているものの、21/22年度の牛肉生産量(子牛肉を含む。枝肉重量ベース)は、187万8000トン(同2.8%減)と減少傾向で推移している。

表8 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン、キログラム)

区分/年度	2017/18	18/19	19/20	20/21	21/22
と畜頭数(千頭)	7,913	8,703	8,697	6,621	6,148
生産量(千トン)	2,238	2,352	2,374	1,931	1,878
平均枝肉重量(kg)	297.0	285.1	287.3	305.7	320.7
一人当たり消費量(kg)	23.8	22.8	19.8	20.1	-

資料：豪州食肉家畜生産者事業団(MLA)「Statistical Database」、ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：生産量および一人当たり消費量は枝肉重量ベースで、子牛肉を含む。

注3：と畜頭数には子牛を含む。

注4：平均枝肉重量は成牛のみ。

イ 輸出動向

牛肉輸出量(船積重量ベース)は、2017/18年度は干ばつの影響に伴う牛肉生産量の増加により輸出量も増加に転じ、19/20年度は129万1000トン(前年度比5.6%増)と3年連続で増加した。しかし20/21年度は、多雨により草地環境が改善されたことから牛群再構築に伴う牛肉生産量の減少を受けて輸出量も減少し、98万1100トン(同24.0%減)となった。

20/21年度の牛肉輸出量を主要輸出先別に見ると、日本向けは24万1700トン(同15.5%減)、中国向けは17万1530トン(同48.2%減)、韓国向けは16万8240トン(同1.2%減)、米国向けは16万4750トン(同10.6%減)と軒並み減少した(表9)。このうち中国向けに関しては、20年5月以降、豪中間の政治的緊張を背景に、中国が豪州の4カ所の牛肉処理場からの牛肉輸入を停止し、その後も停止される処理場が9カ所まで拡大したことが影響している。22年11月現在でも、これら処理場からの輸出再開の目途は立っていない。

表9 牛肉の国別輸出量の推移

(単位:千トン)

国名/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21	輸出シェア (20/21)
日本	273.7	308.8	302.5	284.3	240.2	24.5%
中国	104.1	140.1	228.0	331.2	171.5	17.5%
韓国	178.8	169.4	188.6	170.2	168.2	17.1%
米国	204.1	235.0	240.7	240.2	164.8	16.8%
その他	230.6	269.2	261.8	264.3	236.4	24.1%
合計	991.3	1,122.5	1,221.6	1,290.1	981.1	100.0%

資料：ABARES「Agricultural commodity statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：船積重量ベース。

ウ 消費動向

1人当たり年間食肉消費量(枝肉重量ベース)を見ると、牛肉は前年比で反転して増加に転じたものの、羊肉は大幅減、豚肉も軟調に推移している。また鶏肉は、他の畜種と比べて安価であることや消費者の健康志向を受けて堅調に推移しており、2000年代後半以降、最も消費されている食肉となっている。

2020/21年度は、牛肉が20.1キログラム(前年度比1.5%増)とわずかに増加、羊肉が4.5キログラム(同21.0%減)と大幅に減少した。また、豚肉は27.7キログラム(同1.1%減)とわずかに減少し、鶏肉は47.8キログラム(同2.3%増)とわずかに増加した(表10)。

表10 1人当たり年間食肉消費量の推移

(単位:キログラム/人/年)

区分/年度	2016/17	17/18	18/19	19/20	20/21
牛肉	25.4	23.8	22.8	19.8	20.1
羊肉	8.3	7.6	6.3	5.7	4.5
豚肉	27.7	27.5	28.7	28.0	27.7
鶏肉	48.8	47.1	47.4	46.7	47.8
合計	110.3	106.0	105.2	100.3	100.2

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：年度は7月～翌6月。

注2：牛肉には子牛肉を含む。



写真3 スーパーマーケットの精肉売り場(シドニー市内)

④ 生体牛輸出

生体牛輸出は、東南アジア諸国向けの肥育もと牛が中心となっており、中でも全体の過半を占めるインドネシア向けとベトナム向けで全体の8割以上を占めていることから、これらの国への輸出の動向に左右される。

インドネシア政府は自国の牛肉自給率向上のため、2016年10月以降、肥育もと牛5頭につき繁殖用雌牛を1頭輸入することを義務付ける政策を導入した。加えて、豪州の干ばつによる牛飼養頭数の減少もあり、17年の輸出頭数合計は100万頭を下回った。その後19年までは干ばつによる早期出荷などにより大幅に増加し、130万3900頭(前年比15.8%増)となった。20年以降は多雨による良好な草地環境に起因する牛群再構築や新型コロナウイルス感染症、為替の影響などを背景に、インドネシア向けを中心に大幅に減少し、21年は77万1900頭(同26.4%減)と100万頭を割った17年の9割の規模まで減少した(表11)。

表11 生体牛の国別輸出頭数の推移

(単位:千頭)

国名/年	2017	18	19	20	21.0	輸出シェア (2021)
インドネシア	512.9	599.4	669.9	465.0	409.0	53.0%
ベトナム	165.2	203.3	277.3	297.7	166.2	28.4%
中国	75.7	136.2	158.1	129.6	96.8	12.4%
イスラエル	32.4	60.8	78.1	37.5	24.6	3.6%
マレーシア	15.8	20.8	19.0	24.8	21.8	2.4%
フィリピン	3.5	12.4	18.1	20.9	20.7	2.0%
日本	15.3	14.5	17.9	14.5	11.8	1.4%
その他	46.3	79.0	65.6	58.7	20.8	5.6%
合計	867.1	1,126.4	1,303.9	1,048.8	771.9	100.0%

資料：DAFF

注：乳牛を含む。

⑤ 肉用牛価格の動向

2020年の肉用牛の家畜市場加重平均価格は、1キログラム当たり682.0豪セント(前年比22.5%高)と大幅に上昇しており、19年以降上昇傾向が続いている(表12)。特に20年に入ってから、多雨による良好な草地環境が持続し牛群再構築が進展していることから、牛の需給がひっ迫している状況にある。

表12 肉牛価格の推移(枝肉換算)

(単位:豪セント/キログラム)

区分/年	2016	17	18	19	20
若齢牛	646.3	547.6	530.0	609.7	795.4
肥育牛	571.7	495.7	513.9	578.0	681.5
経産牛	480.6	410.7	397.1	482.8	569.0
加重平均	566.2	484.7	480.3	556.8	682.0

資料：ABARES「Agricultural Commodity Statistics」

注1：いずれも主要家畜市場の価格。

注2：肥育牛は生体重500～600キログラム、
経産牛は同400～520キログラム。